

小豆島・富丘八幡神社神馬と狛犬から丹波佐吉後期石造物を考える

Further Understanding of Later Works by Sakichi of Tamba from his Stone Horse and a Stone Komainu in Tomioka-Hachiman Shrine (Shodoshima Is.)

磯辺 ゆう
Yu ISOBE

要旨

佐吉にとって大きな意味をもつ柏原・八幡神社狛犬とそれ以降の作品の制作過程について考察した。この中には、関・観音山および舍利尊勝寺 11 番上醍醐准胝堂准胝観音を初めとする後期の重要作品が含まれている。限界を越えようとする佐吉のチャレンジに関して、富丘八幡神社にある神馬と他の石工による同時奉納の狛犬から多くの示唆が得られた。また、西讃地方の狛犬と金刀比羅宮の神馬の影響についても考察した。

キーワード：富丘八幡神社神馬、柏原・八幡神社狛犬、西讃型狛犬、舍利尊勝寺石仏、正念寺十一面観音

I. はじめに

丹波佐吉は幕末期に活躍した石工で、細密な像を得意としており、多くの狛犬や石仏が知られている^{1)~6)}。中でも文久元年から翌年にかけては、佐吉にとって大きな意味や謎を持つ作品が続いている。まず佐吉渾身の兵庫県柏原市八幡神社狛犬が造立されたのは文久元年 1861 五月のことである^{1) 2) 7)}。この狛犬の一番の特徴は佐吉第Ⅱ期までとは異なる尾の表現にある。それから 3 ヶ月後、香川県小豆島富丘八幡神社に石造神馬が奉納された（文久元年八月）⁸⁾。佐吉の主な作品は石仏か狛犬であり、神馬は他にない。佐吉の作品群の中では唐突であり、なぜ佐吉が神馬を作ったか謎である。さらに同時奉納の狛犬は他の石工の作であるが、その台座にある「奉獻」は、柏原・八幡狛犬と同じで、当時著名な儒者であり能筆家であった亀井少棠の文字とされている⁸⁾。これは柏原・八幡のために、奉納の中心となっている上山孝之進から特別に依頼されたものである¹⁾。なぜこの文字が富丘八幡狛犬に使われているかも大きな謎である。そして翌二年、石の限界にチャレンジしたかのような三重県関町観音山 11 番上醍醐准胝堂准胝観音（以下観音山 11 番）が造られた^{5) 6)}。石仏本体は、宙に浮き、下から細い蓮の茎と二人の龍王の手で支えられている。これには、観音山の佐吉作石仏の中で唯一紀年銘がある。

いずれも丹波佐吉としてはそれまでの限界を越えるものであり、この数年間は佐吉の石工人生の中で最も密度の濃い時期だったと言えそうである。狛犬で新しい境地に立った柏原・八幡以降を大まかに佐吉の仕事の後期と捉えたい。そしてこの頃から佐吉は、大阪市生野区舍利尊勝寺（以下舍利寺）の仕事に深く関わっていき、計 4 件（銘未確認）を制作する。既知の役行者^{1) 3) 5)}と、最近佐吉作として提起されている 3 件（西国三十三所巡り 11 番、番外花山院、番外弁財天）である^{5) 9)}。中でも 11 番上醍醐准胝堂准胝観音（以下舍利寺 11 番）は観音山 11 番に並ぶものである。これら舍利寺の石仏は佐吉の活動の最後の頃に位置しており、それまでの流れの中でみるとより

理解が深まるだろう。筆者は前著⁹⁾の中でいずれも佐吉作と判断したが詳細は述べていなかった。本稿では佐吉の後期制作物の制作経緯について、それらの形態も含め考察する。特に舍利寺・観音山11番への佐吉のチャレンジに対して、謎の多い富丘八幡神社の神馬と狛犬が鍵を握ると考え、謎を解くことから始める。また柏原・八幡狛犬への努力は佐吉の仕事の中盤であるが、謎を解く上で重要になるため、特に記した。なお佐野・天神社と摩氣神社の狛犬については、制作時期の検討を要するためここではとりあげない。関・観音山の石仏についても要検討であるが、多くは柏原・八幡以前の作と考えられ、本稿では特異な構造をもち造立年が明らかな11番だけを対象とする。以下、年月は、明治5年1872の改暦前を漢数字で、それ以後をアラビア数字で表記する。

II. 小豆島 富丘八幡神社（香川県小豆郡土庄町淵崎）

1. 神馬⁸⁾ (図1)

脚台^{注1)}：但州産村上源照信作花押、世話人

上庄田中傳右エ門、上庄田中平治郎

台座：文久元年酉八月吉日 世話人 大坂北堀

江新江橋 サツマヤ平次郎 □チカ 石工

銀四郎、世話人 上庄村 田中傳右エ門

柏屋平九エ門)

砂岩。高さ約1m。静止像、4本脚で立つ。脚はいずれも折れているが、4本は独立していたことが跡と破片からわかる。一方、太い尾が脚台に連結しており、体の支えとして機能している。「奉獻」の

文字は佐吉の文字ではない。脚台の佐吉銘と、台座の石工「銀四郎」銘から、馬のみを佐吉が制作し、台座制作および設置は銀四郎が行ったものと考えられる。



図1 富丘八幡神社神馬

2. 狛犬⁸⁾ (図2)

阿：奉、文久元辛酉年八月吉日、現主 法寂代、大坂北

堀江新江橋 薩摩屋於チカ 石工 銀四郎 上庄 巳

之助 肥土山 福松

吽：献、世話人 大坂北堀薩摩屋平治郎、上庄 紀氏、

塩屋 定兵衛 鍵屋 未歳男 上庄 萬歳 田中 太

良吉 小海 政次郎

中型。幕末期浪花狛犬、蝦蟇蛙型に近い。垂れ耳、扇尾。「奉獻」は、阿に「奉」、吽に「献」の1対。狛犬作者は神馬を設置した銀四郎で、神馬と同時奉納である。奉納の中心人物は大坂北堀江新江橋の薩摩屋平治郎で、神馬にも関係している。新江橋は堀江川に架かる橋で、佐吉が世話になっていた石為のある南堀江隆平橋^{1) 3)}の西隣である¹⁰⁾。堀江川を挟んで、北堀江と南堀江があるためすぐ隣である。佐吉とは顔

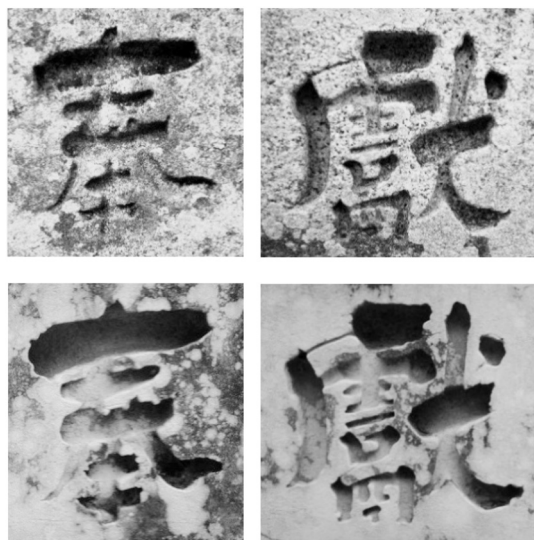


図2 奉獻

上：富丘八幡神社、奉：阿、献：吽
下：柏原・八幡神社、奉・献：吽（修理前）
本狛犬は2011年修理（神社HPより）

注1) 「脚台」：これを筆者は「洲浜」としてきたが、森下恵介氏⁹⁾に従い変更する。

見知りであったに違いない。

富丘八幡狛犬の「奉献」は、柏原・八幡狛犬と同じ文字である⁸⁾(図2)。柏原・八幡では阿吽それぞれに「奉献」の二文字があり、「奉」の最大幅(横棒の長さ)は阿吽とも同じで18.5cm、富丘八幡ではほぼ16.5cmと、やや小さい。彫りは佐吉による柏原・八幡のものがシャープで力がある。富丘八幡ではエッジが甘く、小豆島狛犬研究会が推測する⁸⁾ように銀四郎としてよい。元の書については、兵庫県柏原市の石燈籠(文化九年1812)の例が参考になる。この石燈籠の銘の墨跡が残っているのである¹¹⁾。つまり石に刻む時、貼り付けずに書を見て彫っていることになる。富丘八幡狛犬の「奉献」も同じ方法で(藤原好二氏談)、しかもサイズを変えて彫られたと考えられる。ということは、柏原・八幡の阿吽両方にある「奉献」も、同様に彫られているに違いない。つまり亀井少栗の書は一つであった。それを富丘八幡で佐吉外の石工の狛犬に使うことが許されたのは、その奉納に関係した人物の柏原・八幡狛犬への貢献が大きかったのに違いない。

Ⅲ. 柏原・八幡神社狛犬に至る道筋(表1、図3、4、5)

問題の核となっているTS16 柏原・八幡狛犬(文久元年1861五月)は、佐吉の師である上山孝之進が中心になって故郷に奉納したものである¹⁾。佐吉は育った大新屋の庄屋であった孝之進から読み書きを習った¹⁾が、基礎教養と生き方の師であり大坂での後ろ盾でもあったのだろう。佐吉はこの狛犬に対し大きな努力を重ねた。

佐吉は、大師山他の石造物制作に励んだ宇陀から安政三年末一時帰郷し、育ての親で師匠でもあった難波伊助を看取った^{1) 3)}。その後大坂に戻り、精力的に仕事を進めていく。佐吉は、帰郷後最初の狛犬となるTS8 興留・素蓋鳴(安政四年1857九月)で初期の狛犬を極めた後、狛犬のデザインに工夫を凝らすようになり、特に体形と尾の形に試行錯誤する。その最後が柏原・八幡である(表1)。この期間を狛犬第Ⅲ期と呼ぶ。師孝之進が故郷柏原の八幡神社へ奉納する重要な狛犬であったため、佐吉は従来にないものを造ろうとした。筆者は、第Ⅲ期狛犬はその努力の道筋を示していると考えている^{註2)}。それにより、孝之進が狛犬を佐吉に依頼したのは、帰郷から狛犬第Ⅲ期最初のTS11 伴堂・杵築神社狛犬(安政六年1859四月)までの頃かと推測する。一方、石仏では、帰郷前の奈良県大和郡山市松尾寺楊谷観音(安政三年1856四月、有銘、基壇 石工九兵衛)でほぼ初期のものを極めている。その後、狛犬第Ⅲ期と平行して関・観音山石仏群に取組んでいたと考えられている⁵⁾。石仏と狛犬制作に励んでいた帰郷から柏原・八幡までの頃を大まかに仕事の中盤としたい。同時に楊谷観音の頃から、佐吉は石造物の本体に注力して、設置を他の石工に任せようようになってくる(帰郷後表1)^{註3)}。

改めて、狛犬第Ⅲ期の狛犬を見てみよう。最初の伴堂・杵築狛犬は、それまでとは異なる炎尾と縦長の体形をもつ(表1、図3)。特に上体が長いことが目立つ。体表広く菊紋がある。肘と膝が接するが、これは佐吉狛犬の中では炎尾をもつ本作とTS13 永原・御霊に限られている。また鬣の直毛は阿吽とも前に流れない。この鬣の形は、一つ前のTS10 藤森・十二社(Ⅱ-Ⅲ移行期)に始まり、TS17 沢・春日まで期の区別なく続く(造立順、表1)。それ以前のTS9 阿波までの狛犬では、両方(TS2~4)^{註4)}か片方(TS5~9)が前に流れていた。佐吉狛犬では、このような鬣の流れ方は2例以外首周りの巻毛の配置と関係している(再建除く)^{註5)}。つまり巻毛は、前流れの場合

注2) 森下氏は、安政、文久期の作品にみられる個体差や優劣は佐吉個人の「変化」ではなく、佐吉自身の精巧な作品と下職人分業による量産の「工房作品」の差であるとしている⁵⁾。私見の詳細については、以下本項末までを参照されたい。

注3) 例外はTS11 伴堂・杵築、TS12 下永・八幡で、「照信」銘の他に台座に「佐吉」があり(表1)、設置も佐吉が行ったと考えられる。他に「照信」と「佐吉」の両方があるのは、宇陀市大師山のシンボル立江寺石仏・石祠(嘉永六年1853四月)だけであり、特別な事情がありそうである。柏原・八幡の場合、設置は他の石工によるが、阿吽ともに「照信」銘があり、やはり特別である。なお、観音山では、佐吉の石仏に基壇等はない。一方、「奉献」の文字がある台座の制作は、佐吉の場合も他の石工の場合もあり、予算や依頼者との関係によるのだろう。

注4) TS1 佐野・天は失われたか、現在のTS20 佐野・天がそれに相当するか議論^{5) 12)}があり、ここでは省く。

表1 帰郷後から柏原・八幡神社狛犬までの石造物（観音山石仏を省く）

狛犬の期	狛犬番号	石像	造立年月	西暦	狛犬尾	鬣方向 阿吽	設置場所	基壇制作・設置者
第Ⅱ期	その他	上山家石狐	安政四年四月	1857			兵庫県丹波市	(台座・基壇なし)
	TS8	興留・素盞鳴神社狛犬	安政四年九月	1857	ヤツデ	前後	奈良県斑鳩町	龍田石工九兵衛
第Ⅳ期	TS9	阿波神社狛犬	推定		ヤツデ渦	前後	奈良県斑鳩町	推定他の石工
Ⅱ—Ⅲ 移行期	その他	北山稲荷石狐	安政五年八月	1858			兵庫県丹波市	大新屋石工金兵衛
	その他	越・道標（無銘）	安政五年八月	1858			奈良県明日香村	不明
	TS10	藤森・十二社狛犬（再建） （台座が残る、無銘）	安政五年十二月	1858	（ヤツデ）	（後後）	奈良県大和高田市	不明
第Ⅲ期	TS11	伴堂・杵築神社狛犬	安政六年四月	1859	炎	後後	奈良県三宅町	大坂住石工佐吉
	TS12	下永・八幡神社狛犬	安政六年九月	1859	流れ尾	後後	奈良県川西町	大坂住石工佐吉
	TS13	永原・御霊神社狛犬	安政七年・ 万延元年三月	1860	炎	後後	奈良県天理市	不明
	TS14	西・蛭子神社狛犬（無銘）	万延元年九月	1860	流れ尾	後後	奈良県大和郡山市	石工和泉屋庄吉
第Ⅳ期	TS15	八滝・五社神社狛犬	万延元年	1860	ヤツデ渦	後後	奈良県榛原市	推定他の石工
	TS17	沢・春日神社狛犬（無銘）	文久元年四月	1861	ヤツデ渦	後後	奈良県広陵町	推定他の石工
第Ⅲ期	TS16	柏原・八幡神社狛犬	文久元年五月 （手渡し二月）	1861	流れ尾	前前	兵庫県丹波市	当所石工仁兵卫

- ・第Ⅳ期（ヤツデ渦尾）は、簡便型で、全体の尾の流れとは別に、時々挿入される。 ・狛犬番号は文献4による。
- ・従来TS17の造立を「沢・白山神社、文久元年十二月」としていたが、文献13に従って「沢・春日神社（北宮）、文久元年四月」に変更する。そのため柏原・八幡と造立順が入れ替わるが、混乱を避けて番号は従来通りとする。なお、柏原・八幡が佐吉の手を離れたのは同年二月のため（本文注13参照）、制作自体は柏原・八幡の方が早い可能性が高い。
- ・「鬣方向」は直毛の流れ方を示し、「後」には、下向きも含まれる。
- ・上山家石狐は当初大坂に設置と推定されている（文献3）。造立年月が脚台にあるので初めから台座・基壇は無いものと判断した。
- ・基壇制作・設置者は、基壇や台座に名前がある石工の他、「奉献」の文字等で判断している（文献2、3、7、14、15）。表2も同じ。

首の両脇だけにあり、下方・後方流れの場合脇にも首の後ろにもある。つまり第Ⅱ-Ⅲ移行期から柏原・八幡を除く沢・春日までの鬣直毛の流れ方は、阿吽とも巻毛が首を廻っていることを示している^{注5)}。なお、この時期の狛犬は、巻毛配置や尾が他の時期と異なる他、体形にも細長いものが目立つ。しかしどれも佐吉特有の柔らかな巻毛やしなやかな前脚をもっている。

第Ⅲ期最初の伴堂・杵築にある4つの特徴（炎尾、縦長、膝と肘が接する、阿吽とも巻毛が首を廻る）は、大阪府四条畷市御机神社狛犬（天保十二年 1841 秋九月）（図3）に代表的に見られるものである。ただ、御机では後脚



図3 炎尾の狛犬

左3枚：丹波佐吉第Ⅲ期 TS 11 伴堂・杵築神社 安政六年 1859 四月（尾のみ阿）
 右3枚：大坂屋与三兵衛 御机神社（四条畷市）天保十二年 1841 秋九月（全て吽）

注5) TS 3 丹生川上は阿吽とも前流れだが巻毛は後ろにもある。この頃巻毛の配置を模索していたようである。TS 20 佐野・天では直毛は阿：前、吽：後流れであるが巻毛は阿吽とも後ろにない。再建の TS 10 藤森・十二社は各部が佐吉の狛犬の特徴をよく示しており、後頭部の巻き毛もあると判断できる。再建 TS 18 兵主の阿（前流れ）は判断しにくい。

が大きいため上体と下半身のバランスは良く、首周りの巻毛は菊花状で、体（後脚）表面は饅頭紋である。この狛犬は出雲産の出雲型座形「立尾」（＝炎尾）の模倣で、上記4特徴は、日本海側に多い本来の出雲型座形に由来するようである^{注7)}。大阪府下の模倣作^{注8)}は、江戸時代で16件（安政六年まで13件）知られている^{注9)}。その中で天保十二年までの8件は全て砂岩製で、その後の8件は花崗岩7、砂岩1である^{注10)}。また前半では体表の菊紋をもつものが多い一方、後半では浪花狛犬化が進み、巻毛が首の後ろにないものや肘と膝が接しないものが散見される。佐吉狛犬第Ⅲ期最初のもは、出雲型座形大坂版の、恐らく前半期のものを参考にしていると考えられる。

続いて第Ⅲ期2番目のTS 12 下永・八幡狛犬で流れ尾が初めて登場する（表1）（図4）。この狛犬は、まだ縦長傾向だが、肘と膝は接していない。尾は縦長で厚みはまだ少ない。その後炎尾と流れ尾が交互にきた上で、最終的に柏原・八幡では流れ尾が大きな特徴となっている。尾は厚みが出、ダイナミックに流れている（図4）。首や胴の太い頑丈な体形の一方、鬣の巻毛は小さく耳の下にあるだけである。控えめな巻毛と前向きの直毛で、丸く流れる尾と頑丈な体形のバランスをとっている。この柏原・八幡の前に佐吉が造った2件（TS 17を省く。その制作が柏原・八幡制作の後の可能性があるため）の狛犬の中で、TS 14 西・蛭子は流れ尾であるが、体形は簡便な第Ⅳ期風でずんぐりしている。佐吉はこれで、お礼版を造りつつ、流れ尾に対し巻毛が首を廻る低い体形を試した可能性がある。尾はまだ薄い。TS 15は首周りの巻毛以外普通の第Ⅳ期スタイルで、形の上では特別な意味をもたない。柏原・八幡制作前の思案の時かもしれない。

このような第Ⅲ期の狛犬形態の流れから、筆者は、佐吉が第Ⅲ期の最初から柏原・八幡に向けて試行錯誤してい

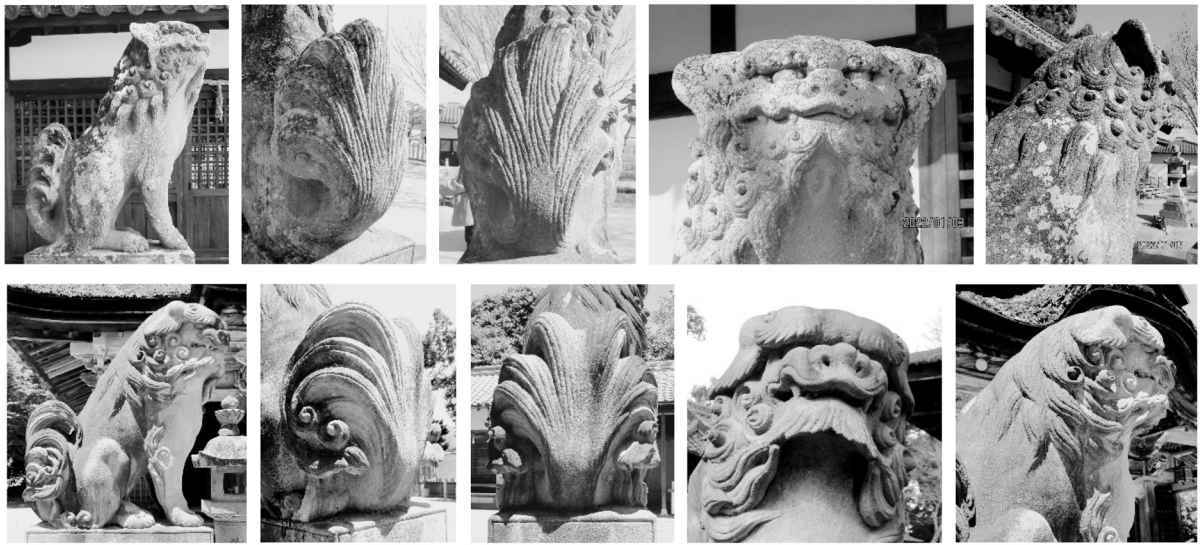


図4 丹波佐吉第Ⅲ期流れ尾の狛犬

上：TS 12 下永・八幡神社（全て呷）、下：TS 16 柏原・八幡神社（修理後）（全て呷）

注6) 柏原・八幡造立後の狛犬の鬣直毛は、阿だけが前に流れる1件（TS 18）、阿呷とも前に流れない1件（TS 19）である。

注7) 4特徴の中で、「炎尾、縦長」は文献16に出雲型座形「立尾」（立尾：廣江正幸氏による、＝炎尾）の特徴とされている。

肘と膝の関係は文献写真¹⁶⁻¹⁹⁾と実見（出雲地方で見た立尾25件－奉納年不明および引退狛犬含む、小型含まず－中：接する22、開く・少し開く3）から判断。首後方の巻毛は前からの写真では難しく、少ないが実見（25件中：後ろにある24、不明1）からである。25件のうち江戸時代紀年銘ありは13件（昭和再建含まず）。

注8) 廣江氏により、大阪府内で見られるこのタイプのもは全て模倣と判断されている¹⁶⁾。

注9) 含めたもの：○小寺慶昭氏による八重垣型14件²⁰⁾－文献20本文中の枚方市意賀美神社（天保十一年1840八月）も含む。

堺市神明神社^{b)20)}（小寺氏推定安政年間）には「辰三月」とあり、天保十五年1844または安政三年1856と推測。○小寺氏報告以前に失われたもの2件含む－東大阪市小坂神社（天保四年1833）²¹⁾、茨木市太田神社（天保十二年1841）²¹⁾。含めていないもの：泉大津市菅原神社（千原神社²¹⁾）は明治13年奉納、堺市桜井神社²²⁾は明治28年の可能性があり省いた。

注10) 現存しない狛犬の石は、文献20（守口市佐太神社、四条畷市忍陵神社）、文献21（小坂神社、太田神社）による。

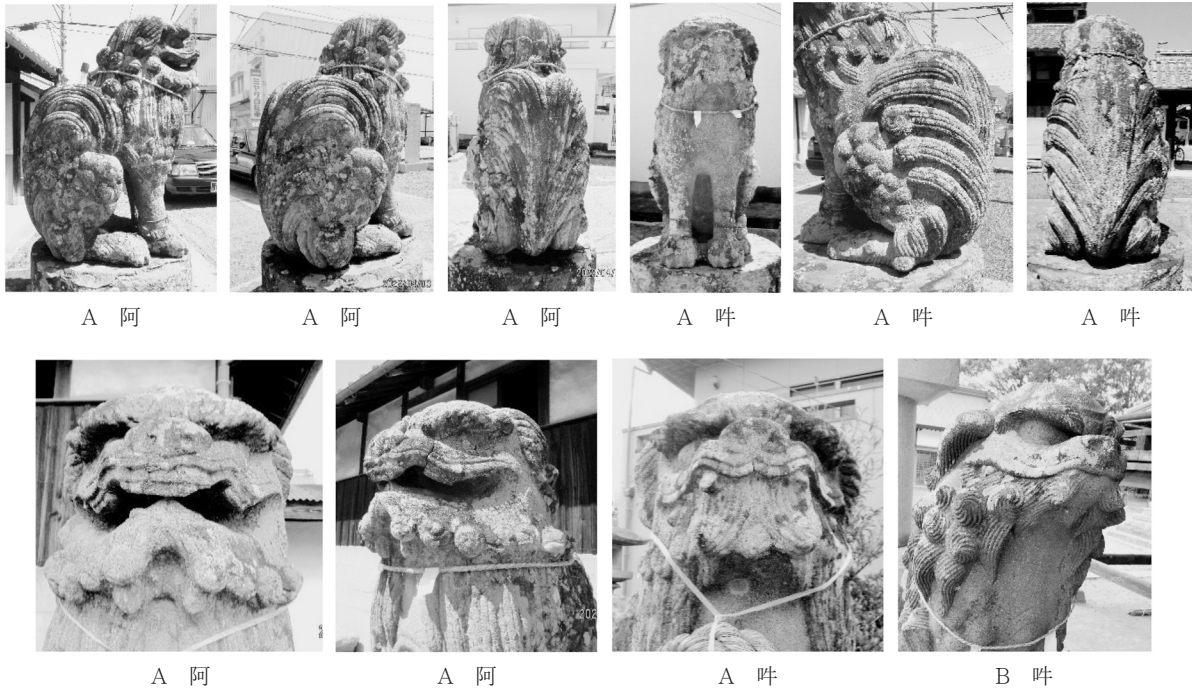


図5 西讃型狛犬

A：丸亀市 神野神社 文政十二年 1829 十一月 石工 宮武荘七
 B：多度津町 熊手八幡神社 嘉永六年 1853 正月 多度津細工人 和泉屋常吉

たとえる。そして、佐吉にとっての課題の中心は尾であり、答えは流れ尾となる。その他の形態変化はそれに付随したものと考えてよいだろう。すると最初の流れ尾である下永・八幡に取り掛かる時、この尾をどのようにしてイメージしたのかが問題となる。

これに関して興味深い狛犬群がある。「西讃型狛犬」（藤原好二氏仮称、図5）と呼ばれ、琴平町金刀比羅宮にある雲州松江石工門兵衛ら作の狛犬（天明元年 1781：文献 23 による）をモデルとしており、西讃地域に多い²⁴⁾ ²⁵⁾。門兵衛狛犬と西讃型は流れ尾（藤原氏による「枝垂れ尾」）が印象的である。やはり縦長で、多くの場合肘と膝が接し（文献 24 の写真から。岩や玉乗り省く）、鬣の巻毛は後ろにもある²⁴⁾。金刀比羅宮門兵衛狛犬は紀年銘をもつ出雲狛犬最古のもので、出雲付近では、寛政・享和の頃に同タイプのもの（廣江氏による出雲型座形「丸尾」＝流れ尾）が確認されている¹⁶⁾。しかし、出雲では、やや遅れて登場した「立尾」（＝炎尾）の出雲型座形がその後主流となり（尻を上げた構形も続いて登場する）、大坂でも模倣された¹⁶⁾。佐吉はこれを第Ⅲ期最初（伴堂・杵築）に参考にしたわけである。一方、西讃地方では独自に門兵衛狛犬由来の西讃型狛犬が発展した²⁴⁾ ²⁵⁾。

当時、金毘羅参りが流行して大坂から専用船が出ており²³⁾、大坂からは、出雲よりも西讃地方の方が行きやすかったに違いない。特に丸亀港からの丸亀街道が参詣ルートとして最もよく利用されていた²³⁾。佐吉が西讃型狛犬を参考にしたとすると、この街道を歩いた可能性が高い。西讃型狛犬は岡山県内にも見られるが、安政年間以前の 5 件は高梁市、玉野市、岡山市に散在している²⁵⁾。それに対し丸亀街道周辺は、より多く、しかも金毘羅参りの旅行者の目に触れやすい。そこで筆者も港から金刀比羅宮まで旧街道沿いを中心に狛犬を見て回った。街道からはずれる多度津町内の 2 件を加えて、見た 36 件中、安政六年 1859 以前（同年造立なし）造立の流れ尾の狛犬は元祖の門兵衛狛犬も含め 9 件であった。この中で、丸亀市神野神社鳥居前の狛犬（文政十二年 1829 十一月）（図 5 A）と、近くにある日吉神社狛犬（天保二年 1831 九月）に注目したい。ともに宮武荘七（＝和泉屋荘七）²⁴⁾ の作である。佐吉の流れ尾（図 4）はこれらによく似ており¹¹⁾、さらに柏原・八幡の目が深く窪み顎鬚のある顔、四角い吻¹²⁾ も似

ている。出雲型座形と西讃型はその出自から似た部分が多く、合わせて参考にしやすい。

佐吉は交互に出雲型座形大坂版と西讃型を試しながら体形と首周り尾を調整し、最後に柏原・八幡で、西讃型により接近しつつ（注11、12参照）、総合化を図ったと考えられる。

IV. 薩摩屋平治郎の役割

ここで富丘八幡の神馬と狛犬に関わる薩摩屋平治郎について考えてみたい。佐吉は薩摩屋とは近くにいる関係でよく知り合っていたに違いない。薩摩屋の商売が何であったかは不明だが、大阪市史²⁶⁾に砂糖商について次のような記述がある。「その盛況を『大坂繁昌詩』（慶応年間）は、/…砂糖の大商は高台橋の南北に在り。白砂糖は讃岐に産し、黒砂糖は薩摩に産す。両国盛んに大船に積み堀江に達す。大商之を買い、日々船場の左海筋に來たりて之を売る。左海筋の商家之を東海北陸の二道に送る。/と記している。」

文中の高台橋（たかきやばし）は、堀江川に架かる橋で、薩摩屋平治郎の店のある新江橋の西隣である¹⁰⁾。この位置関係と屋号から、薩摩屋平治郎は砂糖の大商で薩摩黒糖を扱っていた可能性が考えられる。薩摩の産物を載せた船は勘助島に着船しており、同島北端にあった船番所²⁶⁾（道頓堀口対岸、現 JR 大正駅北方）の管轄下にあったと思われる。ここから堀江へは近い。上記大坂繁昌詩によると、堀江の砂糖大商は「左海筋」の砂糖問屋に卸している。堺筋には唐薬問屋から派生した砂糖仲間「堺筋薬種荒物仲買仲間」がある²⁶⁾。ここに道修町（堺筋北部）の薬種問屋との関係も浮かんでくる。ただ、今のところ薩摩屋平治郎は、砂糖と関わりなく薩摩定問屋の下で荷受をしていた小問屋²⁷⁾の可能性も、さらには薩摩と関係が無かった可能性もある。いずれにしても堀江に店を持つかなり財力のある商人で、物産を運ぶ船の安全は重要な事柄であったに違いない。

当時、金刀比羅宮は海上交通の守り神とされ、瀬戸内海を往来する船にとって重要な場所であった²⁸⁾。薩摩屋平治郎や店の関係者は、船の安全祈願のために流行の金毘羅参りを行い、その折にこの地方の狛犬を見ていた可能性がある。佐吉が尾のデザインに苦心していた時、薩摩屋が示唆したのではないだろうか。佐吉は、西讃地方に面白い狛犬があると教えられ、行ってきたと考えてみたい。その時期は、佐吉の仕事の状況（表1）から考えると、安政六年前半頃が最初かと思われる。丸亀港から金刀比羅宮への道は、新しい狛犬を模索する佐吉にとって、刺激的な旅となり、壁を越えるアイデアを得たに違いない。しかも西讃型は、佐吉が注目していた出雲型座形大坂版に似ていたので、好都合だっただろう。こうなると、薩摩屋は佐吉及び上山家から大きく感謝されることになる。また、薩摩屋は仕事上、川口の御船手に勤務する上山孝之進父子ともよく知り合っていた可能性がある。

なお、亀井家は元來儒と医を兼ね、少柴の夫は医師で洋薬も使っていた²⁸⁾。唐薬屋を通して、薩摩屋平治郎が（砂糖と関わるかどうかは別としても）亀井家につながる人脈を持っていたとしたら、少柴に「奉獻」を依頼できた背景に、薩摩屋の紹介又は仲介があったとも考えられる。すると上山家の感謝は非常に大きく、薩摩屋が自分の狛犬を奉納するにあたって、「奉獻」の使用を許可したということはある話になってくる。

注11) 後方から見ると下永・八幡と神野の尾はよく似ている。ただ、下永・八幡では、尾中央の毛束は割れずに前方に折れ曲がって（図4）下降し付け根で片流れになっている。そのため厚みが少ない。同じ炎尾の西・蛭子でも同様であるが、阿だけ折れ曲がった先が小さく両脇に流れている。一方柏原・八幡では中央の毛束は背の左右に大きく分かれ弧を描く。これは西讃型の特徴である²⁴⁾。つまり佐吉は初め、後ろから見た尾の毛流れをよく模倣したが、毛先を割らずに折り曲げていた。これでは尾に厚みが出ず大きな弧にならない。狛犬制作を重ねた上で、中央の毛束を割ると大きな弧になることに気がついたのだろう。西讃へ再度観察しに行ったと推測している。その上で、佐吉は毛束の弧を透かしにするという独自性を発揮している。

注12) 管見ではあるが、西讃型の吻は頬から窪んだ様に細くなり幅が比較的狭く先が平らなため、一見イノシシの吻風である。熊手八幡（図5B）はその典型と思われるが、莊七作は吻先がやや幅広のため幾分短く見える（図5A）。柏原・八幡はこの形に近い（図4）。佐野・天と摩気の吻は頬幅に近いまま先に伸びるため吻はより幅広である。その他の佐吉狛犬の吻はゆるい山形か三角に近い雰囲気である（例：下永・八幡 図4）。顔は、柏原・八幡直前まで佐吉従来通りだったのが柏原・八幡で莊七風になるのも、再度見に行った時顔に注意が向いたのではないかと考えている。

V. 柏原・八幡神社狛犬「奉献」の筆者

実は、柏原・八幡の「奉献」揮毫者へ疑問が呈されている²⁹⁾。亀井少槩は安政四年 1857 七月に没している²⁸⁾。柏原・八幡狛犬が佐吉の手を離れた万延二年 1861 二月^{注13)}（二月十九日文久に改元）（造立五月）の約 3 年半前である。同様の例が丹波市二宮神社石燈籠（文化九年 1812 九月）で見出されている。揮毫者は東都（江戸）の書家三井親孝であるが、親孝は文化五年（1808）に没しており¹¹⁾、石燈籠造立の 4 年前でよく似た状況である。

可能性の一つは「早期の依頼」である²⁹⁾。書家に依頼するという場合、依頼者はそれなりの地位がある人物であり、力を入れた石造物になるはずである。かなり早くから準備し、揮毫も早くから依頼しておかしくない。佐吉は、上山家石狐（安政四年 1857 四月）制作の前には故郷に帰っており、さらにその前は宇陀にいた³⁾。佐吉への依頼時期は、宇陀にいる頃を外すと、帰郷中から石狐（安政四年四月）直後までなら間に合うところである。上山父子は大坂勤務中だったので、父子どちらかがこの正月に帰郷していた場合、帰郷中でも可能となる。以上の場合、揮毫の手配は早かったが、佐吉の狛犬制作に時間がかかったことになる。

二つ目の可能性は「他人の書」である²⁹⁾。少槩の書を見ると、「少槩の書画が晩年まで闊達さ、とくに字と絵も撥ねに勢いがある」²⁸⁾とされるように、勢いのある撥ねに気がつく。今問題の「奉献」は横棒に力があるが、撥ねは意外に短い。さらに柏原・八幡には「奉献」の他にも少槩による施主に関する文字があるため、これを「少槩伝」²⁸⁾にある文字と比べてみると、少槩の書と考えてもまずまず不都合がなさそうに見えるが、ただ全体にまったりとしている。少槩晩年の書や亀井家次代の人の書と比べてみる必要があるようで、専門家の判断を待ちたい。他の人の書であった場合、少槩揮毫時の逸話¹⁾は消えるが、薩摩屋の紹介・仲介の可能性は残してもよいだろう。

VI. 11 番准胝観音（図 6）

「はじめに」で述べた舍利寺石仏中の 11 番（銘・造立年不明）の検討のために、観音山 11 番（有銘、文久二年 1862 月不明）と比較する。

観音山と舍利寺の 11 番准胝観音の基本的な構造は同じである（図 6）。最大の特徴は蓮台にある。蓮華部は宙に浮き、蓮の細い茎と二人の龍王の手で支えられている。これは、本尊本来の形を忠実に表現しており、石による造形としては極めて困難なものである。ただ、蓮華部を支えているのは茎と龍王だけではなく、茎の背後に太い支えがある（図 6→）。また、観音本体では、観音山、舍利寺とも光背が外円と内円の二重円光で透かしになっている。透かしのある円光は観音山では他にもあり⁶⁾ 佐吉の技術の範囲に入る。手の数は、観音山と舍利寺ともに 18 臂（脇手 8 対、合掌手 1 対）で、札所本尊のとおりである。その一方、胸前の手を合掌にしている点は正しくない³⁰⁾。観音山と舍利寺の 11 番はともに、蓮台、光背、脇手の数に極めて高度な技術が見られる一方、胸前の手は本来の准胝観音のものではない。

舍利寺 11 番は石室に入っているため銘を確認できないが、観音山 11 番と共通する表現の数々から、佐吉によるものと考えて間違いはない。しかし両 11 番にはわずかな違いがある。全体として観音山では柔らかで、舍利寺では硬い印象である。特に仏の表情において顕著である。観音山 11 番のふくよかで暖かな微笑に対し、舍利寺 11 番は硬い微笑である。筆者が前に舍利寺 11 番は佐吉のものではないと考えた³⁾のは、この本尊の表情からである。この顔に近いものは宇陀市大師山でも見られ、筆者は、当時このような表情を持つ石仏を佐吉の範囲外ではないかと考えていた。しかし、観音山では、佐吉銘付きでもかなり顔の形、表情に相違があることがわかり、舍利寺 11 番の顔も佐吉の範囲に入れて間違いはない。この難しい形からすると両者は時期的に近く、完成度から舍利寺の作が先行すると考えてよさそうである。

注13) 金森氏はこれを万延元年としこの時手付けを打ったとしている¹⁾が、二年の間違いでこの時狛犬代金が支払われた³⁾

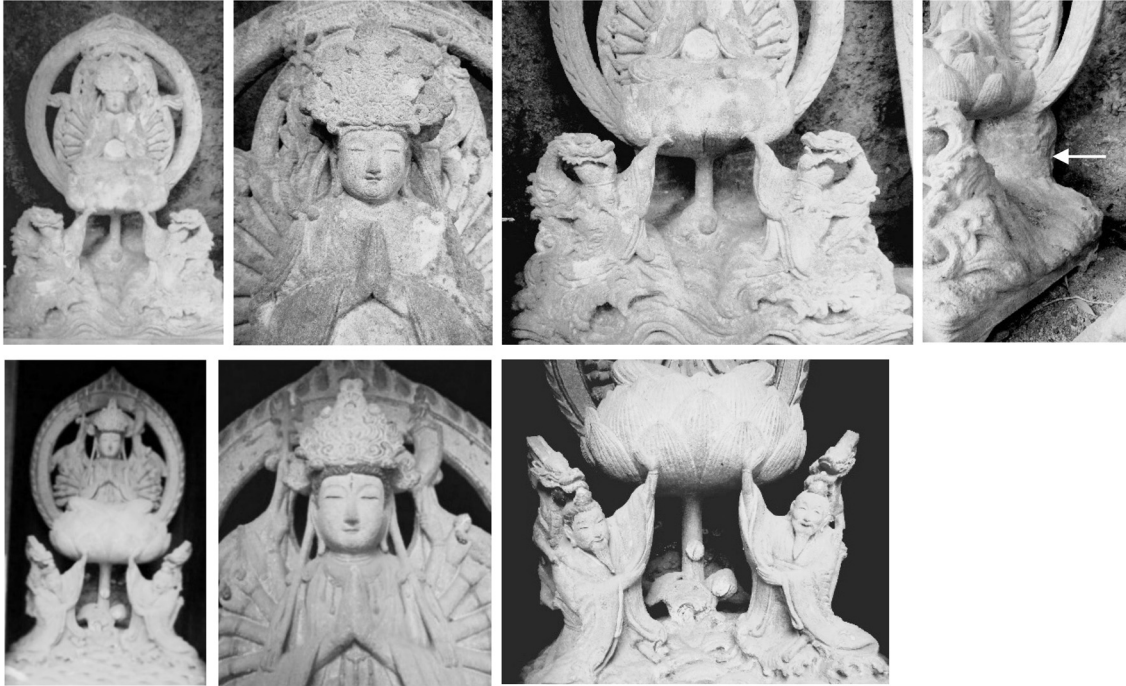


図6 西国33所巡り11番上醍醐准胝堂准胝観音

上：観音山11番、→：支え
下：舍利寺11番

多数の脇手や透かしのある光背は、佐吉にとっては他の観音山石仏で達成済みで可能な範囲である。しかし蓮台の構造については、削り貫きの細い茎や龍王の手で大きな上部を支える必要があった。観音山の石仏の中でこれに迫る例はなく、また狛犬の脚でもここまで迫ることは難しい。技術上の壁を越える必要があった。そして観音山11番（文久二年1862月不明）の前に神馬（文久元年1861八月）が来る。

VII. 神馬制作の意味について（図7）

神馬はTS16 柏原・八幡狛犬の造立（文久元年1861五月）から3ヶ月で奉納に至っている。同狛犬が佐吉の手を離れた時（同年二月）からでも6ヶ月後となる。この間にはTS17 沢・春日を制作した可能性もあり、いかに佐吉でも、未経験の極めて難しい神馬を造るには、相当なスピードであると思われる。思うに、薩摩屋はいつの頃から佐吉に富丘八幡の狛犬を依頼し、それに対し佐吉から狛犬の代わりに神馬を造ると申し出たのだろう。なぜ佐吉はこの時神馬を造ろうと考えたのだろうか。

柏原・八幡の狛犬ではデザインが問題で、佐吉にとって特別に困難な技術上の課題は少なかったはずである。いつ頃から佐吉が11番の蓮台を実物同様にしようと考えていたかはまだわからないが、制作順は、困難さから柏原・八幡狛犬を先に11番を後に、と考えたと推測する。蓮の茎で仏を支えるには、技術的な問題が大きく立ちはだかっていたに違いないからである。

そこで注目されるのは、金刀比羅宮の神馬である。三穂津姫社脇に小型の青銅像がある（図7）。この馬は、文政七年1824奉納で、「体の一部をなでると自分の同じ悪い場所が良くなるという信仰により、多くの人々になでられてきた」²³⁾。今も印象的であるが、当時もよく目に付いただろう。尾は地面に接しそうな円筒形で、佐吉の神馬の尾（図7）にそっくりである。馬全体も似た雰囲気をもっている。佐吉は、金毘羅参りの折に見たこのなで馬から、神馬を作る、尾で支えるというアイデアが生まれたのではないだろうか。狛犬では達成できない細い4脚で立つことへの挑戦であり、その延長線上に細い茎で支える石仏がある。他に金刀比羅宮には慶安三年（1650）奉納²³⁾



図7 金刀比羅宮青銅「なで馬」(左、中左)、富丘八幡神馬(中右)と野間馬(右)(天王寺動物園 2021,10,26)

の木馬もあるが、大きくしかも木馬舎に入っているため、なで馬の方が観察しやすい。またこのなで馬は在来馬「野間馬」(愛媛県今治市天然記念物)(図7)に似て、リアルである。佐吉は、柏原・八幡が終わるとすぐに神馬に切り替え、失敗も重ねたに違いないが、金刀比羅宮のなで馬を参考に、尾を支えにして馬を細い脚で立たせることに成功したと思われる。生きた馬は当時いくらかでも見られたはずで、佐吉は身近な馬も観察したに違いない。馬の成功を見た上で、准胝観音にとりかかり、まず舍利寺11番を成功させ、次いで観音山11番を造ったと思われる。准胝観音も神馬と同様に、背後の支えを使って大きな上部を支えている。

佐吉にとって神馬を造ることは、技術的な問題解決のために必要であったと同時に、柏原・八幡狛犬の課題解決に導いてくれた薩摩屋への感謝でもあったに違いない。

VIII. 神馬後の石仏

神馬を経て、佐吉は困難な11番を成功させることができた。神馬後の佐吉の石仏について、改めて検討してみたい。神馬と11番の後の佐吉作石仏で従来から知られているものは、舍利寺役行者と上山家不動明王である^{1) 3)}。そこに、新報告の石仏の他、新たに追加された舍利寺の花山院、弁財天^{5) 9)}の詳細も加えて造立順に述べていく。

1. 舍利寺番外花山院(図8)と11番上醍醐准胝堂准胝観音

花山院(文久元年1861十月、銘未確認)は僧形で、宇陀市大師山の弘法大師坐像と似た姿であるが、倚像の点が異なる。面長、小さな口元等佐吉石仏の特徴をよく示しており、大師山1番横の地藏(造立年不明、有銘)と並べると大変似ていることがわかる(図8)。この表情から花山院は佐吉作としてよい。造立は神馬(文久元年1861八月)の2ヶ月後である。二つの間隔が短いため、大きな努力が必要だったに違いない舍利寺11番(造立年月不明、銘未確認)より前と考える。よって、舍利寺11番を文久元年から二年にかけての造立とすると、舍利寺三十三所札所石塔造立の最後を飾るはずの30番(安政七年1860二月)⁹⁾の約2年後になる。舍利寺およびこの事業を請け負った和泉屋五郎兵衛はともに、佐吉作を遅くなくても待つという姿勢だったと思われる。他にないものになるこ

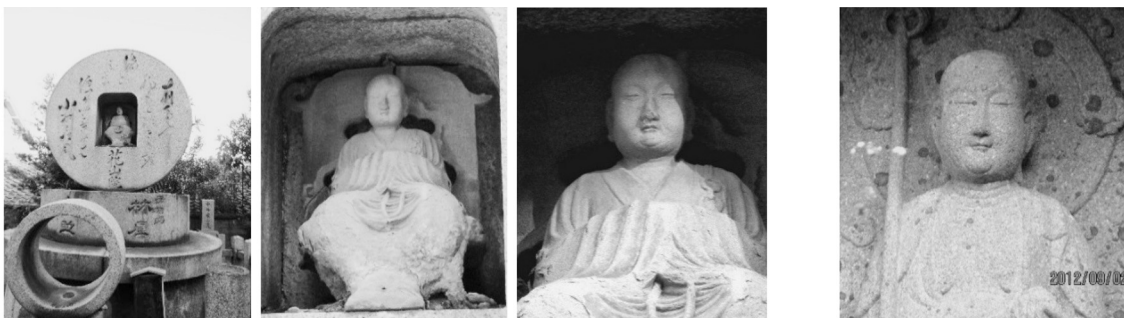


図8 舍利寺花山院(左3枚)と大師山1番横地藏(右端)

とがわかっていたのに違いない。そのような状況の中で、花山院は神馬と11番という困難作の間に造立されたわけである。神馬と11番の間に橋をかけるような特色があるだろうか。曲泉（椅子）の背もたれは佐吉らしく凝っており、腰下の空間の有無、椅子の脚の形状等が興味深いところである。一方、石塔全体のデザインは斬新で力強い。基壇と設置は五郎兵衛店と考えられるが、石塔部分がどちらの手になるかは今後の検討課題である。

2. 正念寺十一面観音（奈良県磯城郡川西町下永）（図9）（新記載）

杉本佳代子氏からご教示を受け新たに報告する。本像（無銘）は、全体に松尾寺楊谷観音（安政三年1856四月）や関・観音山石仏に共通する特徴をもっている。仏の表情、光背の模様、頭部の作り、蓮華部に接続した岩座と脚台等、確実に佐吉の作風である（図9）。ただ、楕円の蓮華部、浅い岩座等、楊谷観音よりも簡略である。台座に書かれている文字は佐吉の文字と言ってよい（図9）。この石仏には特に神馬との関連性は認められない。

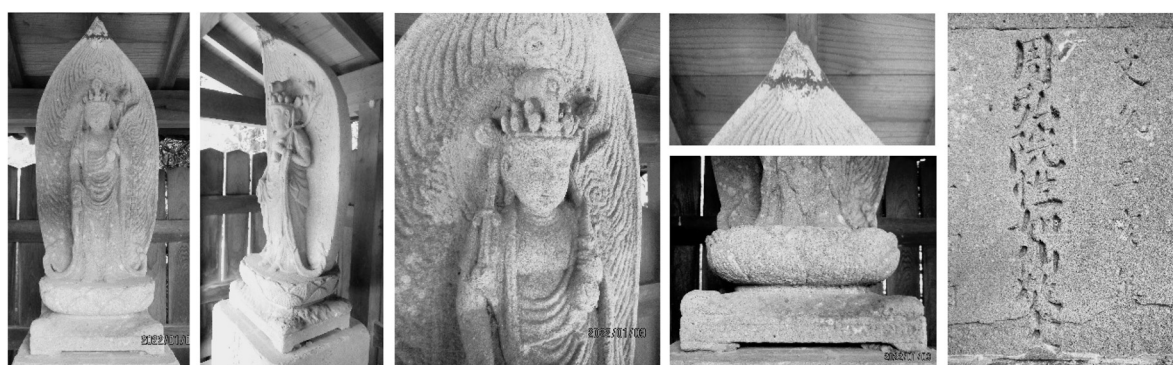


図9 正念寺十一面観音

台座正面の「文久三亥年二月十四日」はこの像の造立日というよりも上人の入寂日のように思われる。この寺は佐吉の狛犬（TS12）がある下永・八幡神社の隣であり、上人が佐吉と深い関わりがあったことが推察される。特に新しいものを目指したのではなく、上人入寂を受けて制作されたと考えられる。とりあえずここではその日付で、11番と役行者の間に入れることにする。なお台座側面には明治に入ってからの日付と戒名が追刻されている。

3. 舍利寺番外役行者と弁財天および上山家不動明王（図10、11）

現在のところ、佐吉による石仏の最後に来るのは、舍利寺役行者（元治元年1864五月）、上山家不動明王（慶応二年1866二月、有銘）、舍利寺弁財天（慶応二年1866五月）の3件である。舍利寺の2件は銘未確認である。



役行者全体

役行者脇侍・後鬼

弁財天全体

弁財天本尊

弁財天眷属部

図10 舍利寺石仏 役行者と弁財天



観音山 11 番

舍利寺役行者

上山家不動明王

舍利寺弁財天

図 11 文久二年 1862 以降の佐吉作石仏 →：天冠帯

舍利寺の役行者と弁財天は、本尊と 2 つの脇侍部をもつという基本構造が 11 番と共通している（図 10）。役行者では、前鬼・後鬼を前脇に従え、同時に本尊は足もとが高下駄で浮き上がったように見え、11 番を踏襲している。倚坐の点は花山院を踏まえている。さらに小さいながら削り貫きの細長い錫杖を持つ等、より細密な細工になっている。大師山一番横地蔵（図 8）でも削り貫きの錫杖を表現しているが、役行者ははるかに小さいためより困難である。また明るく笑っている（図 11）ことがそれまでの佐吉石仏と大きく異なり、別な境地に達している。役行者が佐吉作である事に異論はない。

一方、弁財天では本尊・蓮華部の下に大きな岩座がある。岩座には 2 集団の人物像（眷属）が左右に配されて、脇侍的な形をとっている（図 10）。上部本尊についても、光背に透かしはないが、光背の形、削り貫き表現の天冠帯（図 11→）等、観音山に通じるものがある。やはり佐吉の作と考えてよいだろう。しかし、本尊が浮き上がったように見える下部の透かし彫りはなく、弁財天の表情は佐吉風を漂わせながら生気がない（図 11）。観音山の諸石仏、舍利寺と観音山の 11 番、役行者へと比べてみると、佐吉は、精密さや仏の表情で大いに進化している。しかし弁財天では、全体の構造は 11 番に準じているものの、削り貫きの少ない、生気のないものとなっている。

弁財天は役行者から 2 年後の造立で、その 3 カ月前に上山家不動明王（有銘、慶応二年 1866 二月）が制作されている（表 2）。この不動明王は、光背の火炎を透かし彫りにしており佐吉らしいが、胴や腕は細く弱々しい³⁾（図 11）。これら不動明王と弁財天の制作時期について考える時、注意が必要である。つまり、上山家不動明王は石仏のみのため、紀年銘はほぼ像が完成した時である。一方、弁財天は石室に収められ池の中に大掛かりに設置されている。舍利寺では、三十三所関連石造物の設置は和泉屋五郎兵衛店によると考えられる。弁財天の場合、入念な基礎工事を必要とするため、像自体の完成と全体の造立の時期が離れる可能性があり、佐吉が弁財天をいつ頃制作したかはさらに検討を要することになる。ともあれ佐吉は、舍利寺石造物中の 4 件を造ったわけで、同寺三十三所事業への関わりがかなり深いものとなる。

IX. 文久元年以降の仕事の概観

柏原・八幡狛犬を造立した文久元年 1861 以降の佐吉作品を、年別に表 2 にまとめた。一時帰郷した丹波から安政四年 1857 春頃大坂に戻って以来（表 1 参照）、佐吉は大坂に拠点を置いていたと考えられている³⁾。この時期、石造物の設置は現地の石工によることが多くなった（表 1、表 2）。柏原・八幡狛犬も大坂で制作され、現地に運ばれていったことが記録に残っている¹⁾。大坂近郊の舍利寺でも、石仏を収める石塔や石室の作者についてはさらに検討の必要があるが、設置は事業全体を請け負っていた和泉屋五郎兵衛店と考えて良い。この間、佐吉は多くの場

表2 文久元年以降の佐吉作品

年	造立月、石造物	設置場所	基壇制作・設置者
文久元年 1861	四月：TS17沢・春日神社狛犬（無銘）	奈良県広陵町	推定他の石工
	五月：TS16柏原・八幡神社狛犬（手渡し二月）	兵庫県丹波市	當所石工仁兵衛
	八月：富丘八幡神社神馬	香川県小豆島	石工銀四郎
	十月：舍利尊勝寺花山院（銘未確認）	大阪市生野区	推定和泉屋五郎兵衛
文久二年 1862	推定：舍利尊勝寺11番准胝観音（銘未確認）	大阪市生野区	推定和泉屋五郎兵衛
	月不明：関・観音山11番准胝観音	三重県亀山市	（台座・基壇なし）
	十一月：TS18兵主神社狛犬	大阪府岸和田市	不明
文久三年 1863	（二月十四日）：正念寺十一面観音（無銘）	奈良県川西町	不明
	九月：TS19神岳神社狛犬	奈良県斑鳩町	推定他の石工
元治元年 1864	五月：舍利尊勝寺役行者（銘未確認）	大阪市生野区	推定和泉屋五郎兵衛
慶応元年 1865			
慶応二年 1866	二月：上山家不動明王	兵庫県丹波市	（台座・基壇なし）
	五月：舍利尊勝寺弁財天（銘未確認）	大阪市生野区	推定和泉屋五郎兵衛

- ・ 舍利寺関係の銘は脚台にある可能性がある。
- ・ 正念寺十一面観音の日付けは上人入寂日と考えられる。
- ・ 他に西林寺松尾家墓石（無銘、紀年銘なし）（大阪府岬町）がある。
- ・ 設置者は文献2、3、7、本稿による。

合狛犬や石仏自体の制作に特化して、精力的に独自のものを造っていたわけである。その中で、文久二年の観音山11番から元治元年の役行者までの間に位置する3件（表2）は、いずれも新しいものを目指したものではない。正念寺十一面観音は上記のとおりであり、TS18兵主（現在は平成7年の模刻品）は、奈良文化財同好会の写真²²⁾で見ると耳が柏原・八幡に似ているが、尾は写真と模刻から定型の第IV期のものと判断できる。TS19神岳も典型的な第IV期型である。神岳の前に観音山8番石仏が入る可能性はあるが、これも特別なものではなく、この間の努力の中心は舍利寺役行者であろう。以前役行者の前に病気をしたと書いた³⁾が、今は、まだ病気ではないと考えている。神岳神社狛犬にやや問題があるように見える⁷⁾のは、単に第IV期の簡便型で、佐吉が軽く造っているからであろう。

佐吉は、30台後半に宇陀に入って以来、観音山11番を造った文久二年1862（佐吉数え47歳）まで毎年精力的に作品を残している^{3~5)}。翌文久三年は普通作2件だけであるが、これは大いに力を入れた役行者の助走期でもあり、未報告の作品がある可能性もある。ところが役行者の後は、まだ弁財天制作が残っている中、上山家不動明王（慶応二年1866二月）まで2年近い低調期がある（表2）。この間に大阪府阪南町西林寺松尾家の墓石（紀年銘なし、銘なし）^{1) 3)}が入る可能性があるが、観音山の他の石仏がここに入る可能性は少ない。観音山8番の前にある石燈が、文久三年1863七月にこの事業が完成したことを示している⁵⁾からである。上山家不動明王が細い腕や弱い体躯をもつこと、弁財天に生氣がなく割り貫きも少ないことを合わせて考えると、この2年弱の間に大幅に力が衰えたようである。この時期には、病気、あるいは造立年不明や未報告の作が入ってくる可能性もある。上山家不動明王の制作場所と弁財天の制作時期も合わせて今後の研究課題である。

X. おわりに

小豆島の神馬から思いがけず、様々なことを紐解くことができた。佐吉の仕事の足取りから見えてくることは、彼は常に向上しようとしていたことである。お礼用と思われる定型的なもの（第IV期狛犬、石仏では正法寺十一面

観音等)以外、常に何か課題を設け、前進した。彼が多数の職人による工房形式を取ったかどうか、それは初期の大師山以外不明である。宇陀の大師山石仏群は確かに佐吉をリーダーとする「工房作品」(森下氏による「複数の下職人の分業によって量産された」⁵⁾)と言ってよい。当時、石工が店を構えた場合、それは典型的な工房と言えるが、佐吉は最後まで店を構えなかった。その上活躍の中盤以降、石仏や狛犬自体の制作に特化し、基壇制作や設置に関わらない姿勢だったように見える。店を持つ、多くの弟子を持つということは佐吉の願いではなく、ひたすら石の限界に挑戦したのである。さらに柏原・八幡狛犬や舍利寺11番では、依頼を受けてから完成までに相当長い時間を要していることがうかがえる。柏原・八幡では上山孝之進は完成を待たずに亡くなっており^{1) 3)}、舍利寺11番では、三十三所廻り石塔群最後のはずの30番よりかなり後になってからの造立と推測される。これらは、重要な作の場合、佐吉が納得するまで完成に至らないこと、周囲もそれを了解していたことを示唆している。第三期の狛犬に見られる変化は佐吉の試行錯誤であって、それを経てようやく新たな佐吉の作品に至ったのである。

ただ手伝いの手はあったに違いない。世話になっていた南堀江の隆平橋の石為では、石の下工作や運搬等を店のものが行っただろう。お礼用と思われる第四期の狛犬は佐吉としては定型で、他者がある程度を担当したかもしれない。ただ、それ以外のものは、ほとんどを自分で造ったに違いない。最初の石の大枠の形からきちんと計算できていないと佐吉の思い通りのものは造りにくいと思われる。また舍利寺の場合は、事業を担っている和泉屋五郎兵衛店が支援したに違いないが、石仏そのものは佐吉固有のものと考えてよい。

本稿をまとめるにあたり、多くの人に助けられ後押しされた。山西輝美氏からは貴重な文献を頂くとともに富丘八幡の狛犬、神馬をご案内頂き、杉本佳代子氏からは正念寺十一面観音および柏原・八幡「奉献」についてのご教示と多数の文献を、藤原好二氏には著作とご教示を、亀山幸治氏には舍利寺花山院についてのご教示を、山内順子氏には著作を頂いた。また舍利尊勝寺には調査にご協力頂いた。心から感謝の意を表する。

引用文献

- 1) 金森敦子(1988)『旅の石工―丹波佐吉の生涯』法政大学出版局 274 pp
- 2) 磯辺ゆう(2007)「丹波佐吉の狛犬1―記載」『奈良文化女子短期大学紀要』38:19-30
- 3) 磯辺ゆう(2008)「丹波佐吉の石造物とその一生」『奈良文化女子短期大学紀要』39:1-38
- 4) 磯辺ゆう(2013)「丹波佐吉狛犬の再整理―付阿波神社奉納時期についての考察―」『奈良文化女子短期大学紀要』44:27-43
- 5) 森下恵介(2019)「『丹波佐吉』の実像」『日本文化史研究』50:1-23
- 6) 磯辺ゆう・裏宗久(2020)「関・観音山の西国三十三所巡り石仏名表示札の再検討」『奈良学園大学紀要』13:9-25
- 7) 磯辺ゆう(2007)「丹波佐吉の狛犬2―考察」『奈良文化女子短期大学紀要』38:31-42
- 8) 小豆島狛犬探究会(2017)『小豆島のこまいぬ』小豆島狛犬探究会 128 pp
- 9) 磯辺ゆう(2021)「舍利尊勝寺における江戸時代の大型石造物造立経緯」『奈良学園大学紀要』14:19-34
- 10) 水地悠之介(2003)『大阪堀江今昔 堀江三十三橋橋づくし』燃焼社 165 pp
- 11) 山内順子(2017)「地域の歴史を照らし出す文化九年の石灯籠」『竹田歴史資料室だより 歴楽 TAKEDA』
- 12) 磯辺ゆう(2012)「丹波佐吉の狛犬再記載―佐野・天神社」『奈良文化女子短期大学紀要』43:41-55
- 13) 奈良県広陵町史編集委員会編(1994)『広陵町史本文編』(復刻版)臨川書店 1201 pp
- 14) 磯辺ゆう(2010)「丹波佐吉の狛犬再記載―八滝・五社神社」『奈良文化女子短期大学紀要』41:23-34
- 15) 磯辺ゆう(2011)「丹波佐吉の狛犬新記載―西・蛭子神社」『奈良文化女子短期大学紀要』42:27-40

- 16) 廣江正幸 (2008) 「出雲の狛犬について (4)」『古代文化研究』16 : 131-158
- 17) 廣江正幸 (2004) 「出雲の狛犬について」『古代文化研究』12 : 117-139
- 18) 廣江正幸 (2005) 「出雲の狛犬について (2)」『古代文化研究』13 : 83-119
- 19) 廣江正幸 (2007) 「出雲の狛犬について (3)」『古代文化研究』15 : 77-105
- 20) 小寺慶昭 (2003) 『大阪狛犬の謎』ナカニシヤ出版 276 pp
- 21) 木村茂 (1970) 「大阪近郊の石製狛犬の研究 (第1報) -年代不明の狛犬について-」『大阪教育大学紀要』19 : 第I部門 163-180
- 22) 奈良文化財同好会 (1999) 『狛犬の研究-大阪府の狛犬-』奈良文化財同好会 狛犬の会 165pp
- 23) 日本観光文化研究所編 (1982、1983) 『重要有形民俗文化財 金毘羅庶民信仰資料集 第一巻、第二巻』: 金刀比羅宮社務所
- 24) 藤原好二 (2018) 「讃岐石工による出雲型狛犬の模倣」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』10 : 128-142
- 25) 藤原好二 (2012) 「彦崎石工 山本兼松とその狛犬」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』4 : 76-88
- 26) 新修大阪市史編纂委員会編 (1990) 『新修大阪市史第四巻』大阪市 1058+39pp
- 27) 国史大辞典編集委員会編 (1985) 「薩摩問屋」395-396 「砂糖問屋」414-415 『国史大辞典第六巻』吉川弘文館
- 28) 庄野寿人 (1992) 『閩秀亀井少棨伝』(財) 亀陽文庫・能古博物館 94pp
- 29) 橋本萬平 (2000) 「亀井少棨と名石工丹波佐吉」『西日本文化』363 : 9-13
- 30) 「准胝観音」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/准胝観音> 2022,9,22 最終閲覧

参考文献

丹波佐吉関連の文献の中で、従来引用されることが少なかった資料を参考文献としてここに挙げておく。杉本佳代子氏から頂き、ここに深謝する。拙著上記文献3 (2008) に「新」として記載した神楽岡神社常夜燈 (安政二年十一月) は以下の仲氏2 (1987年)、宇太水分神社常夜燈 (安政二年五月) は仲氏3 (1988) に記載されている。

- 1) 金森敦子 (1983) 「石の笛-丹波佐吉のこと-」『日本の石仏』28 : 67-79
- 2) 仲芳人 (1987) 「石工・丹波佐吉の大和での作品」『日本の石仏』44 : 11-14
- 3) 仲芳人 (1988) 「石工・丹波佐吉の大和での作品Ⅱ 付石工・龍田村九兵衛について」『日本の石仏』48 : 36-40
- 4) 仲芳人 (1989) 「石工・丹波佐吉の大和での作品Ⅲ」『日本の石仏』49 : 73-75
- 5) 仲芳人 (1999) 「奈良県の近世石造狛犬」『歴史考古学』44 : 28-41

